埴谷雄高作品集

文学論文集

4

河出書房新社

埴谷雄高作品集4 ©1971

一九七一年一二月二〇日初版　一九七三年五月五日再版発行

定価——一二〇〇円

著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎　装本——杉浦康平

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社　東京都千代田区神田小川町三—六　電話　東京　二九二—三七一一　振替　東京　一〇八〇二

印刷者——守安　巌　印刷所——東京印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社　(3395—436004—0961

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文学論文集

目次

9——14 序詞——寂寥
15——26 存在と非在とのつぺらぼう
27——37 夢について
38——52 可能性の作家
53——64 不可能性の作家
65——67 夢と想像力と
68——73 存在と想像力
74——78 思索的想像力について
79——82 夢と人生

83——93 観念の自己増殖
94——104 還元的リアリズム
105——109 迷路のなかの継走者
110——116 何故書くか
117——123 あまりに近代文学的な
124——127 カントとの出会い
128——139 現実密着と架空凝視の婚姻
140——144 『散華』と《収容所の哲学》
145——149 埴谷雄高氏へ——高橋和巳
150——158 埴谷雄高氏への手紙——真継伸彦
159——164 論理と詩の婚姻について
165——170 「政治と文学」について

171—176 決定的な転換期
177—183 椎名麟三
184—190 武田泰淳
191—194 梅崎春生の挿話
195—202 踊りの伝説
203—205 『崩解感覚』の頃
206—211 三島由紀夫
212—216 詩人の或る時期
217—238 酒と戦後派
239—245 異常児荒正人
246—249 本多秋五
250—254 原民喜

255—259 原民喜の回想
260—267 絶望・頽廃・自殺
268—276 大井広介夫人
277—305 「近代文学」創刊まで
306—310 「近代文学」同人拡大の頃
311—314 「近代文学」と「中国文学」
315—324 終章——想像力についての断片
325—338 見てしまった男の夢——井上光晴
339—351 解題——白川正芳

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序詞　寂寥

太古の闇と宇宙の涯から涯へ吹く風が触れあうところに、そいつはいた。そいつは石のように坐つていた。そいつが立ち上ると、山毛欅と樅の森から一群の鷓鴣が飛び立ち、暗い山山はざわめき、顫える木霊が谷から峰へまでうねり響いた。

何時からそいつは其処に坐つていただろう。重い氷河が岩角にきしむ時のはじめから、獣皮をまとつたそいつが其処にいたというものがあつた。年経た樹皮のように削られた苦悩の凹みがそいつに見られるともいわれた。虚空に針のような朔風がはためく夜、氷の光つた山の背を跨いでゆくそいつの巨大な影を見たものがあつたという。そいつは生きるために、この世界にせめひしぎあつているものの力を何処からかひつつかんで帰つてくると信ぜられた。

しかし、何時からかそいつは石のように坐つていた。そいつは朽ちた樹の下に坐つていた。そいつの胸のなかを、時折、漆黒の夜の空のような寂寥がかすめた。

そいつは湿つた羊歯類がむれた土壌から芽吹く音を聞いた。香わしい夜の大気のなかで静

かに開く花の揺れ顫える音をも聞いた。軟らかな木の実からはじき出た綿毛が微風の渦のなかを飛び散ってゆく爽やかな匂いを嗅いだ。そして、太古から時間のはてへまで睡らせつづける甘美な《もの》の歌のなかにそいつは睡っていた。きらめく陽光をあびて垂れた枝から枝へ小さな栗鼠がけたたましく走りまわっても、そいつは眼をさまさぬことがあった。

けれども、時折、闇に眼を見開くと、吹き荒れる凄まじい暴風のような凶暴な発作がそいつに起った。そいつが立ち上ると、山毛欅と樅の森は顫えるようにざわめき、暗い山々と木霊はともに立ち上って咆哮した。肌毛だつ魂へしみこむような凄まじい咆哮であった。その鬱寥たる唸り声が森から森へ顫える風に乗って響き渡ると、深くうねった谷を越えた向うの糸杉の山の中腹で一匹の瘠せた狼が何時も頭を擡げた。

針を植えたように夜空にそそり立った糸杉の山に立ち上ったその狼は、嘗て木霊の棲む山毛欅と樅の森のなかを彷徨い歩いたことがあった。風と雨に敲たれ無数の羽虫に蝕まれて朽ちた樹の下に、石のように坐っているそいつをその狼は見つけた。そして、湿った羊歯の鋸り葉を戦かせそよがせながら地底へ打ちこむようなそいつの呟きをも聞いた。

《聞いているか、地熱よ。》そう深い地底へ囁きこんでいるその枯れた地点から、白い瘴気がのぼった。《とにかくその日まで待とう。それまでは妥協しておこう。だが、間違えちゃいけないぜ。たとえ俺が乾いた砂のように風化しようと、お前やそこにあるさまざまなもの、

それと許しあいをもとめてるんじやない。俺は俺がそこから出てきた過誤をとにかくその日まで許しておこうというのだ。》

ぜんまいのように捲いた羊歯の蔓がゆらゆらと揺れた。白くたちのぼる瘴気のなかに顫えている鋸り葉の先端に一匹の小さな羽虫が這つており、そして、やがて透いた葉脈のはずれから眠たげな音をたてて飛び立つた。山毛欅と樅の森は暗くざわめいていた。地底から重くうねり返つてくる遠雷のような響きにその太い幹を揺すられながら。

瘠せた狼は石のように坐つたそいつのまわりを巡り歩いた。雨と風に敲たれたそいつの姿からすでに乾いた石の匂いがした。朽ちた樹の下に据えついたように、太古から本来そうあつたように、そいつの蹲つた背は微動もしなかつた。瘠せた狼の尾がそいつの頬に触れると、そいつは凝つと振り返つた。そのあたりの羊歯の茎や顫える花や澄んだ大気までぎくりとして、しんと静まりきつてしまうほど険しい凝視を向けて。

瘠せた狼はひたと眼をあわせると、自身の軀が一つの石になつてゆくような冷寥たる光に貫かれるのを覚えた。氷河の裂目に落ちこんで透明な壁をひたと覗きこんだ瞬間の感覚に似ていた。目に見えぬ白い小さな羽虫の群れが皮膚の上から虚空へ凄まじい速さで飛び去つた。いまだ粘土の形をもたぬ《前思惟》時代からの微光が石のように蹲つたそいつから奔しつた。

山毛欅と樅の森が暗くざわめきたち、咆哮しはじめると、瘠せた狼はつねにその瞬間を想

い浮べた。すると、漆黒の夜空をはためきわたる風のような寂寥がこの痩せた狼をも吹き抜けた。痩せた狼は尾を垂れ頭を擡げて、山毛欅と樅の森のざわめきにつれて咆哮した。針のような糸杉の山から裸の山へ、寂寥は寂寥を呼び、ざわめきはざわめきを伝えて、響きわたつた。

雨と風は裸かの大地を敲つた。時の歩みは湿つた羊歯の鋸り葉を枯らし、新たな捲き蔓を微風のなかに延ばした。朽ちた樹が音もなく倒れると、その暗い空洞から小さな羽虫がわーんと湧き立つた。太古の静寂にかえつた森にはその眠たげな羽虫の音のみが揺れ響いた。山毛欅と樅の森がざわめきはじめても、それにつれて唸りあげる痩せた狼の姿は糸杉の山の中腹に見えなくなつた。針のように突きたつた糸杉の山の中腹を探ると、その前足を揃えて頭を擡げかかつた白い細い骨が風と雨に敲たれていた。

山毛欅と樅の森はざわめきはじめた。朽ちた樹の倒れた跡は濶い空間となつて展いていた。そして、そいつの姿ももはや見えなかつた。そいつの蹲つた地点には一つの白い石が置かれていた。風と雨に敲たれたその石は砕けはじめていた。山毛欅と樅の森のざわめきにつれて、それは風化した。羽虫の飛びゆく唸りにつれて、砕けた石は乾いた砂粒に風化した。太古の静寂のなかで、その乾いた砂粒は音もなく崩れ落ち、微風につれて吹き散つた。

一つの白い石が消え失せたとき、そこに同じような白い痕がのこつた。其処には草も生え

なかつた。羊歯の捲き蔓は其処から斜めの方角へ延びた。そして、そこから一陣の風が舞い起ると、山毛欅と樅の森の暗いざわめきのなかを吹き通り、凍つた山々の峰を越え、深くうねつた谷をわたつて、その風は宇宙の涯から涯へまで絶え間もなく吹き抜けた。

――――「序曲」第一輯二三年一月

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com